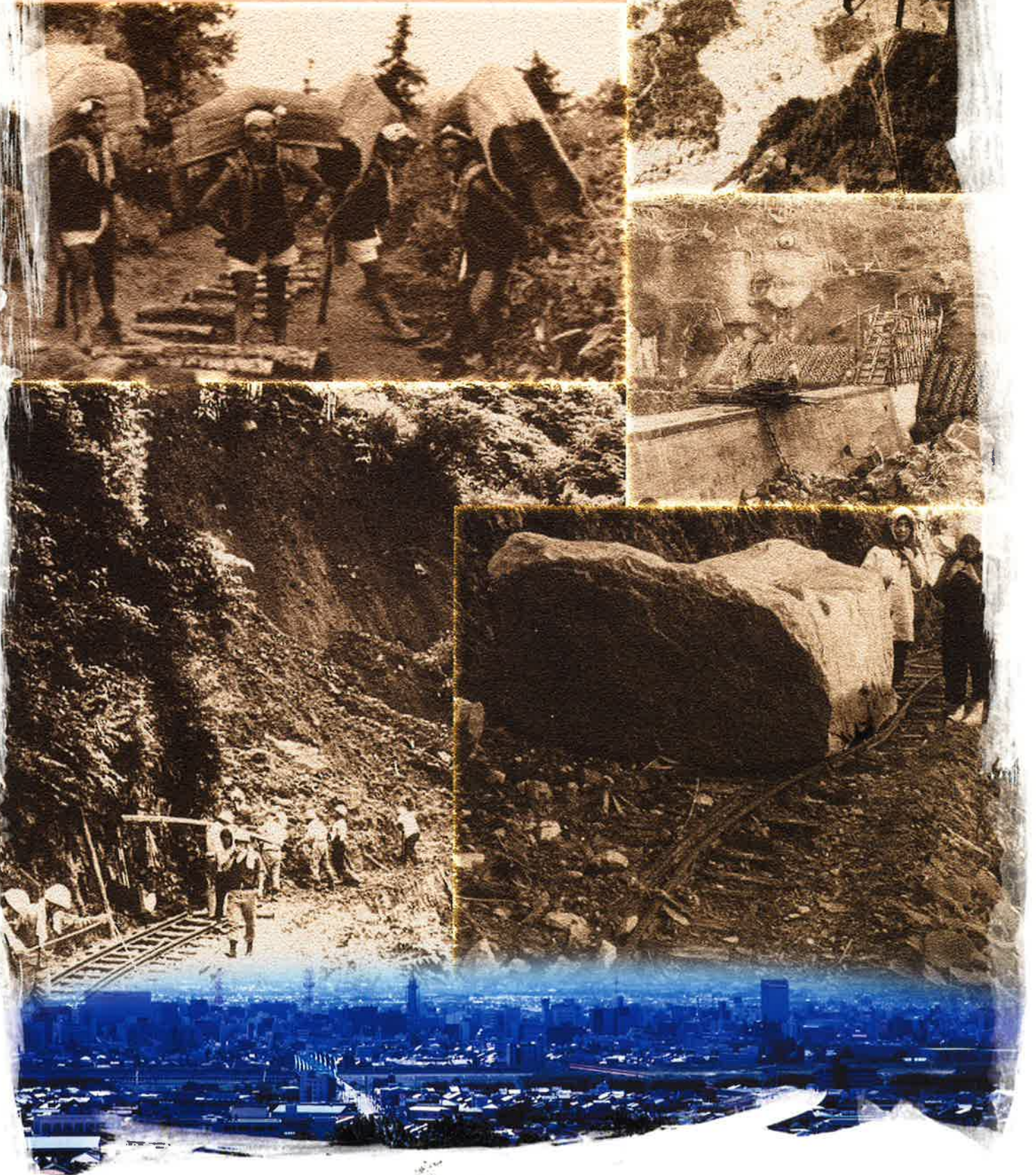


第12回企画展

立山の崩れと生きる 砂防を支えるひとたち



ごあいさつ

1858(安政5)年発生した飛越地震は、立山カルデラ内の
大おおとんびやま鳶山、小ことんびやま鳶山などの崩壊を引き起こしました。堆積した
大量の土砂は、やがて土石流となって常願寺川を下り、
富山平野に多くの被害を及ぼしました。

その後もたびたびおこる災害に対し、砂防工事が明治
時代より立山カルデラ内で行われるようになりました。
しかしながら、それは崩れと絶えず向き合う、まさに命を
かけた難工事となり、現在に至るまで続けられているのです。

今回は工事を最前線で支えてきたひとたちにスポットを
当てました。多感な時代を砂防とともに生きた少年、現場で
働くひとたちを支えた「まかな賄いのおかあちゃん」や「かあちゃん
看護婦」、そして、危険をかえりみず、命がけでひんし瀕死の仲間の
生命を守ろうとする男の姿・・・さまざまな人間のおりなす
ドラマがここにあります。

この機会に立山の崩れと生きるひとたちの姿を知って
いただき、また防災についても考えていただければ幸いです。

立山カルデラ砂防博物館

立山砂防の起り

安政5年(1858)飛越地震により立山カルデラの大鷲山・小鷲山の崩壊は大災害をもたらすとともに常願寺川を日本一の暴れ川に変貌させました。

県の砂防

明治24年(1891)の大雨で常願寺川流域は大きな被害を受けました。富山県の要請をうけ、内務省より技師ヨハネス・レイケが派遣されました。しかし、水源地であるカルデラの崩壊は著しく、当時の技術では治めることが出来ず、下流の河川改修の指導を主に行いました。その後も幾度となく土砂災害に見舞われ、富山県は常願寺川を治めるために当時の最高の技術を注ぎ込んで水源地での工事に着手し、懸命の努力をしました。しかし、明治39年(1906)の着工から17年目、堰堤の完成を目前にした大正11年(1922)に再び壊滅的な被害を受け、県の砂防計画は根底から崩されました。



赤木正雄の登場

世界でもまれな大崩壊地立山カルデラの崩壊土砂を治めることは非常に難しく、それはヨーロッパで近代砂防技術を修得した、当時我が国ただ一人の砂防専門技師・赤木正雄の手に委ねられました。赤木は大正14年(1925)7月、10日間にわたり市瀬内務技官、岡正雄富山県知事一行と共に徒歩でカルデラに入り、大鷲山崩壊地の頂上周辺を踏査し、自分の修得した技術で土砂流失を防ぐ砂防の施工が可能であると確信しました。

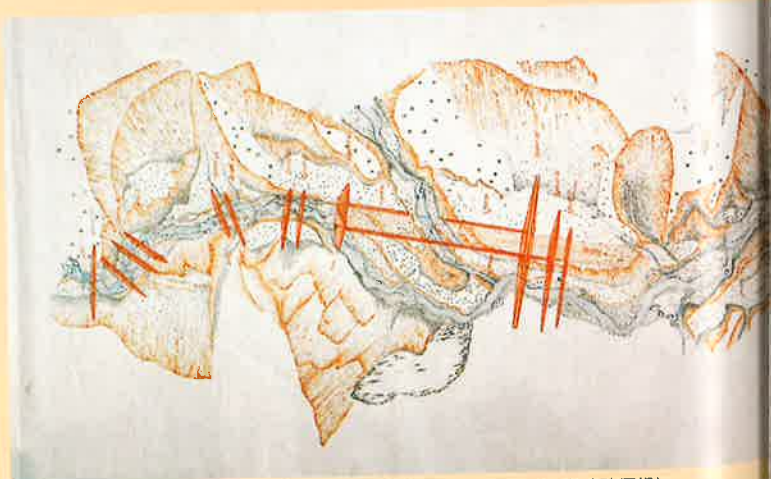
砂防法改正—直轄砂防へ

富山県は県の単独事業での完成は無理と考え、国営による工事を要望しましたが、当時の砂防法では、一府県内に流れる河川の工事は直轄事業の対象とは認められていませんでした。しかし、県を挙げての国営事業化への運動がついに砂防法を改正させ、国の一大プロジェクトとして直轄砂防事業が行われることとなりました。

法律六件公布
十八日官報に特別の協賛を要する砂防法改正法律六件を公布した。大正十三年砂防法改正法律(一)直轄事業に關する法律、(二)河川砂防事業に關する法律、(三)河川砂防事業に關する法律、(四)河川砂防事業に關する法律、(五)河川砂防事業に關する法律、(六)河川砂防事業に關する法律。

東京日日新聞
(大正13年7月19日)

一、砂防法中改正法律(即日施行)



赤木正雄による白岩砂防堰堤及び上流施設計画図(向かって右端が白岩砂防堰堤)

市瀬内務技監一行が
愈々立山一帯を視察
十日間に亘つて實地を踏査

二、市瀬内務技官、岡正雄、赤木正雄、吉武十次郎、中野中三郎、三河上清一郎、長、金岡久左衛門、車志浦上健

因に一行は左記二十名(除くある)市瀬内務技監、岡正雄、岡知事、赤木正雄、吉武十次郎、中野中三郎、三河上清一郎、長、金岡久左衛門、車志浦上健

赤木一行、立山を踏査

富山新報
(大正14年7月29日)



軌道を 支えるひとたち

立山砂防工事専用軌道のトロッコは、常願寺川における国としての最初の砂防施設・白岩砂防堰堤を建設するため、初代立山砂防工事事務所長赤木正雄博士の発案で、敷設されました。以来現在に至るまで、工事用資材の運搬だけでなく、水谷平に寄宿生活している砂防工事従事者の生活物資を運ぶ生命線としても活躍しています。

専用軌道は、千寿ヶ原から水谷平まで全長18km、標高差642m、所要時間1時間45分、この間にトンネルが16カ所、橋が21カ所、スイッチバックが9カ所・42段、樺平では連続18段で高低差200mを一気に昇る、レール幅61cmの日本一狭い軌道です。

トロッコ運転手と車掌

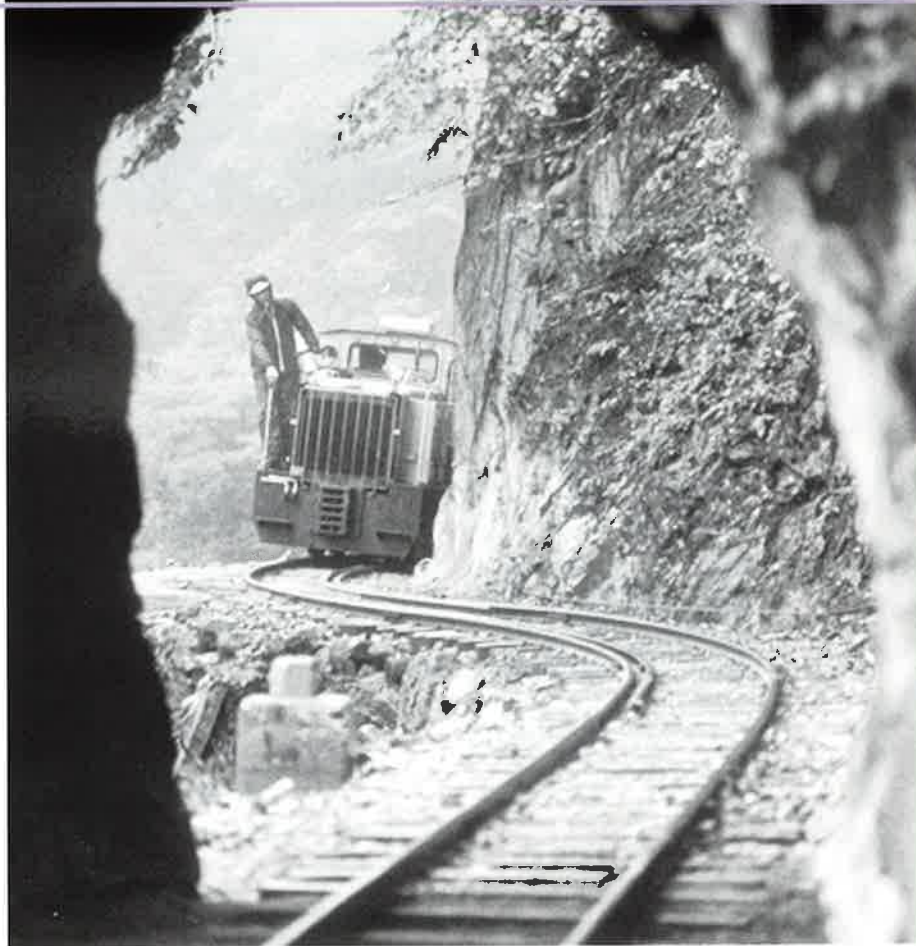
トロッコの運行は、朝一番の巡視から始まり、安全のチェックをします。運転手と車掌、巡視員2人の4名で行います。落石や倒木、路肩の崩れ、レールの損傷がないか、山側の法面やスイッチバックのポイント切り替えに異常はないかの確認も欠かせません。毎日、これらを確認します。そして定時運行の一番トロッコが麓の千寿ヶ原を出発するのです。

路肩が崩れたばかりのところに機関車が乗り上げて脱線し、谷底に転落した事故もありました。大岩が路線をふさぐこともありました。トロッコが通過した直後の落石もありました。これらは珍しい話ではありません。

スイッチバックを通過する時は、車掌の合図が命の綱。全神経を集中させます。

落ち葉やアブラムシの脂でスリップしてブレーキが利かないこともあります。

1時間45分の行程は、ちょっとした異変にも気を配らなければならない、命がけの仕事です。



生活を 支えるひとたち



砂防工事最前線基地水谷平には15社ほどの建設会社が入って来ます。それぞれの会社の宿舎には炊事のかあちゃんたちが働いています。賄いの仕事は朝3時頃から始まります。作業員が元気で仕事出来るように…、病気をしないように…そんな祈りを込めて、お袋の味作りに、賄いかちゃんたちは一生懸命です。

山の仕事が閉じる秋の日「来年また合おうね。元気でおられ」と胸熱くして別れ、春には「元気やったあ？ またよろしくね」と心を寄せ合う水谷村は、カルデラに来る人みんなの故郷なのです。



賄いのかあちゃん

Tさんの場合

中学を卒業すると働きに出ました。女手一つで頑張っている母親を楽にさせてやりたい、その思いだけでした。もっと稼いで家に仕送りをしたいと、近所の夫婦について津軽を離れ、着いた先は富山市の常願寺川河口近くの建設作業所でした。20歳の時です。

働き始めた昭和30年代は、馬車が採取した砂利を運搬していたころです。

つらいことは多かったけれど、一日一日を懸命に生き、手にした月給は8千円、夢のような金額でした。5千円の仕送りが出来ました。

結婚を機会に職場を離れていましたが、やがて、山で働かないかと誘われました。それは立山カルデラの水谷平での、作業員宿舎の賄いの仕事でした。常願寺川河口近くで始めた富山での生活が、30年以上の年月を経て上流に繋がる不思議なめぐり合わせを感じました。

今は娘と一緒に宿舎を切り盛りしています。

Sさんの場合

昭和39年(1964)5月下旬「出稼ぎに行くと、ゼンコになるぞ、行がねか」と近所の親方の誘いで、現場がどんな所か想像も出来ないまま出稼ぎに出ました。2人の男の子を母親に預け、一番下の4歳の娘と夫の3人で20時間余りをかけて富山にやって来たのは33歳の時でした。

初めて水谷に入った時、雪深い山奥の職場に驚き、新天地への希望より不安が次第に大きく膨らんできました。

「えらいとこだな。帰るに帰れんし、ここで頑張るしかないな」、「ここで病気になったら死ぬだけだな。体に気いつけねばな、父ちゃんも娘も、病気になったらおし

まいだな。どうしたらいいべ」、「なして、こつたらとこさ来たんだべ」と、わけの分からない悲しみばかりがこみ上げてきました。

覚悟を据えた肝っ玉で苦勞を乗り切り、念願かなって故郷に家を建て、今は子供たちも立派に成長しました。「父ちゃんも母ちゃんも、もう山へ行ぐのやめれ。おら、小遣いやるから」と言ってくれますが、春が来ると父ちゃんも母ちゃんも山へ行く仕度をします。4歳だった娘も2児の母親になり、かつてのかあちゃんと同じように子供を連れて山に入るようになりました。母と娘はこの水谷村で同じ道を歩んでいます。

砂防工事を 支えるひとたち

立山カルデラの砂防工事現場の最前線基地、水谷平では、毎年15社ぐらい、300～400人の人たちが寄宿生活をしながら働いています。いつ何が起こっても不思議ではない危険と隣り合わせの作業です。一瞬の気の緩みが命取りになることもあります。

人里を離れ、“天涯”ともたとえられる危険な場所で、下流のひとたちを土砂災害から守るために、命を賭けて挑んでいる男たちがいるのです。



Mさんの場合

【仲間を失う】

昭和36年(1961)ころ、水谷平の対岸の資材運搬道路で除雪していた作業員のブルドーザーが運転を誤って転落し、崖の途中の落石と雪の間に突っ込んで止まりました。能登から作業に来ている兄弟の弟でした。その兄でさえ崖の高さに足がすくんで下りることは出来ません。

その時Mさんは「なにしとんがや、なんで助けんがや、わしが行く」と言うが早いかロープを体に巻きつけ、雪渓に走りだしました。底まで200m近くもある急峻な崖です。他の会社の作業員を救出するために、Mさんは自分の命を顧みずに走ったのです。どの会社の人だろうと、砂防で働く人たちは仲間だという熱い思いが走らせたのです。その姿を見ていた中の社員2人がMさんの勇気に動かされ、後から追いついていきました。Mさんは雪に半分埋まったブルドーザーに体を通り込んで、作業員を引っ張り出し、

背負って雪渓をよじ登りました。上でロープを引っ張っていた人たちは感動で声をあげました。作業員は即死でしたがその光景を見守った人たちは、今もあの光景を忘れられません。悲慘な出来事に胸打ちひしがれ、あるいは歓喜に沸き立つさまざまな体験を通して、砂防工事に携わる人達は心を通い合わせます。

「気いつけられ、がんばられや」。いつの時代も人のために命を張る人は多くありません。

危険と背中合わせの仕事場では、熱い心を持った人が大切にされなければならぬと、誰もが思います。

しかし年月が経つにつれて、その多くは忘れ去られていきます。

Mさんは命を張るばかりではありません。毎朝、工事の車が走り出す前に、カルデラの中の現場をまわって、夜のうちに落ちてきた石を片付け、危険な箇所がないか、点検していました。

危険は、どんなところにも姿を変えて隠れています。小さな油断から雪だるま式に大きくなって安全を脅かします。毎日のちょっとした変化も見逃さず、それを教えてくれる自然に学ばなければならない謙虚さも必要なのです。